よのもきゝ板

こうおぼくし 并一

哥と詞を名どきわ

[V. 15]

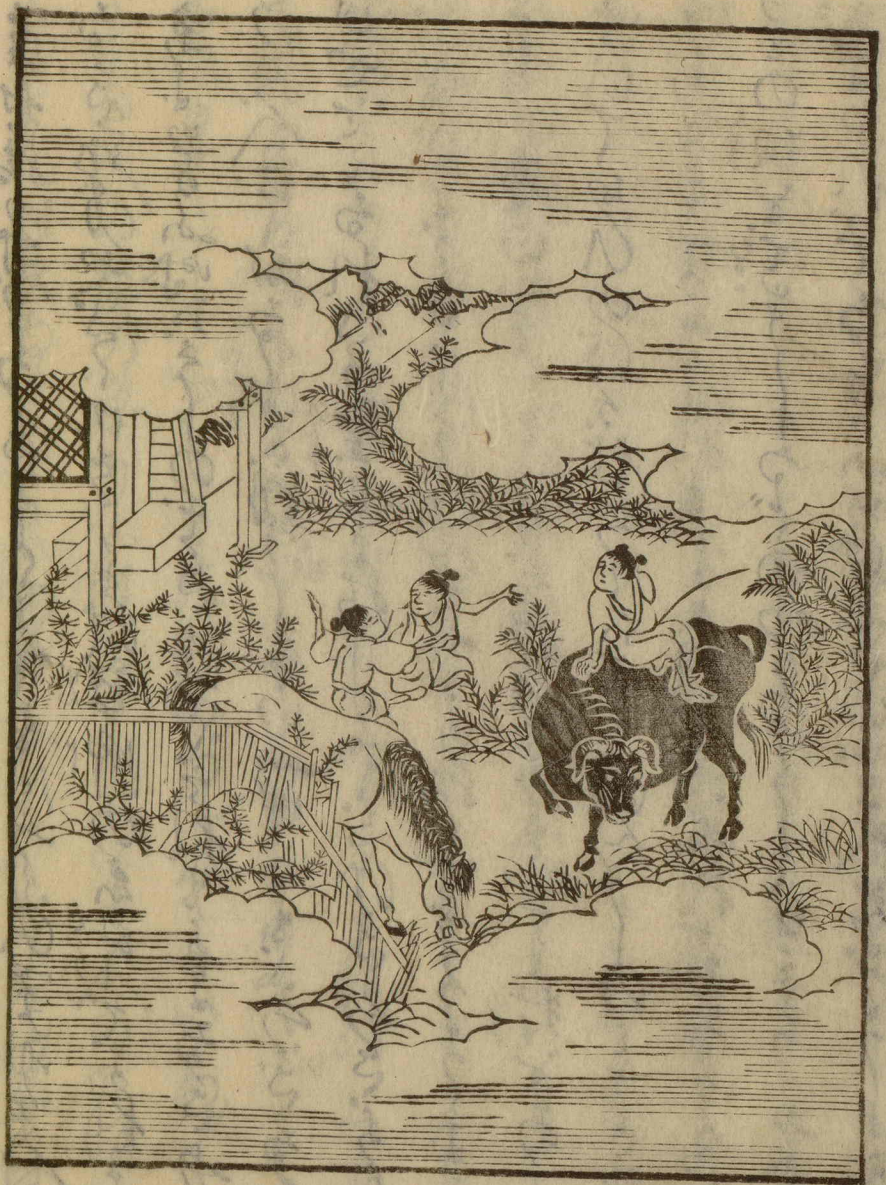
PL788
.4
.G4
1654
vol. 15
copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

又むひあつふ人もなきれ身まで。いうじうころ
ぼそげなりしを。むひ（添た遷ノ事）かけぬれことのいでさて。
とふ（添ノ）ひまもなくこえざりしを。いかあしきれ
いきほひまこそごとまもあらずもうなきほどれ
れなきけぢりとおぼしこるしかど。まちうけ（末ノ）
給れこもとれをばさまは。大宅のほしのひかりを。
こゝいの水（七夕ノ祭ニすゝなこと）まうつしこゝ心ちして。もぐし給し
程まかゝる世（添ノ）のさはぎいでさて。なべてのようく
おぼしまぎれしまぎれまいぎとふくぬかこの
心ぎしいぎちりはれこゝやうまて。とをくおりし
ましまし後（のち）ぶりかへてしもえこぐひさてし給えず。

その名称ほ志げしハなくくもなし給しをさし
月ふりまゝにおもれにさびしきれありさ夜なり。
ふりさ名げらなどは女げんいでやいとくちおしきれ
すくをなりやり。おぼしず神仏のあらされなへんん
やうなりし。れ心ちへにかゝらよそがもひともいで
かもすりもれなりやりと。ありがたう三なりしを。
おぼるのかれことにいひなげらまゝたのむかな
なきれ赤ノありさ夜こそかなしそれとつぶやきなげゝ。
さかるにはなりつきたりしあるのさしごろハ。
いふかひなきさびしさにめなれてもぐしたまふ。
中にすてしよづきてなしひにけり年月にいと

こんがうくせひなげくべし。まこうしもさてあるもぬ
ごき人ぞいをのづから来りつきてありしをこれ
つきぐにまゐるがひていきちりぬ。女がらのいのち
こんぬもありて。月日にまゐるがひてかうしもれ人
がすくなくなりゆく。もとよりあれたりし交(ひさちノ)の
うちいとゞきつゐのまゝ家にありてうとましう
けどをきこぐちにぶくろうの心を朝夕に見て
ならしつゝ。人げにこそさやうのものもきられて
かげくしかれ。こゝ雨などかしからぬ拙者所を
えて。やうくうちをあらひ。拙にびしきこと
のこゝかずしらぬにまれくのうりてきふらふ人ハ



地
八月の望つきあらかりしさし。らうどもく（ひたちの家ノ）
こうれかし。志もれやどものちかるきいたぶき
なりしなどは。初子のこゝつゞるのこりて。立とまる
げしぐるなし。かふりこえて。衰ないうじこそと
おほかり。ぬれ人なといふひたかる心あるもれも。
おもひや里のさびしかれば。はや。此家（ひたち）をぞふかうの
もれるこゝすぎてよりこぎりかれば。かくいうじき
望らやぶるれども。さすがまたんでんの内がりハ。
ありしはしつゝひかりしず。いやくかるかいたりき
などする人もなし。ちりハいもれども。まぎるゝこと
なきうかりしきはすまねまて。あ（まノ）りしくらし給。

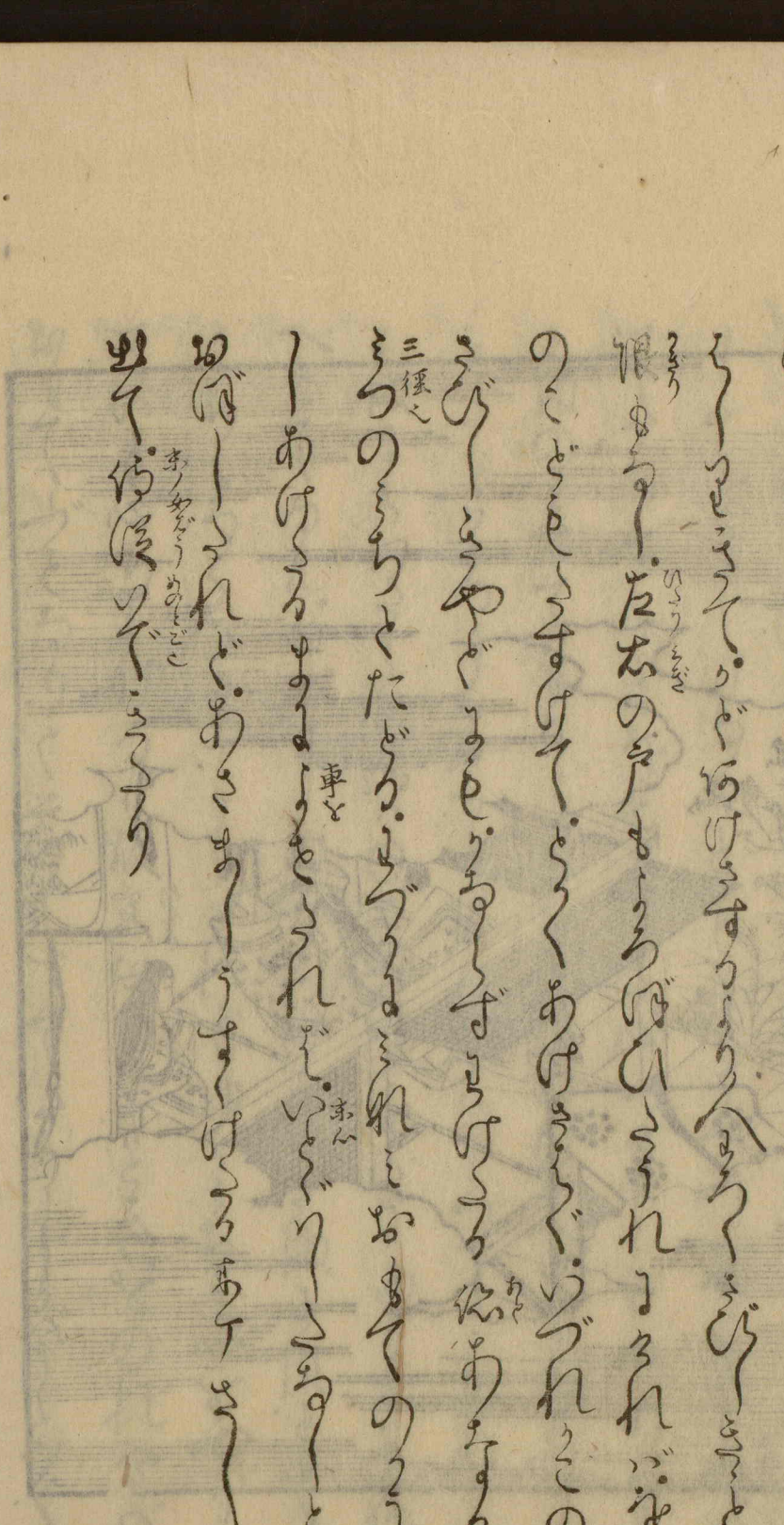
くやびめの物語の思ひよりきたるをぞとさくの
まさぶりもれよし給ふうるとてもありしき
やうよえりいで題をも讀人をもわしり心ふる
こそこどころもありかれうるもしきりむやがえ
こちのくよがえなどのふくごめるよふることくもの
めなれうるなどは、いとすさまじげなるをもめて
ながめ給ふりくはひきひろげうまふいまれよれ
人のすめる程うちよこをとなひなどいふとはいと
もづしくしぬてこなる人もなれどずぐなど程
よを給いずかやうようりしくぞもれし給ける
侍従といひしれめれとごぢりとそこしごろ

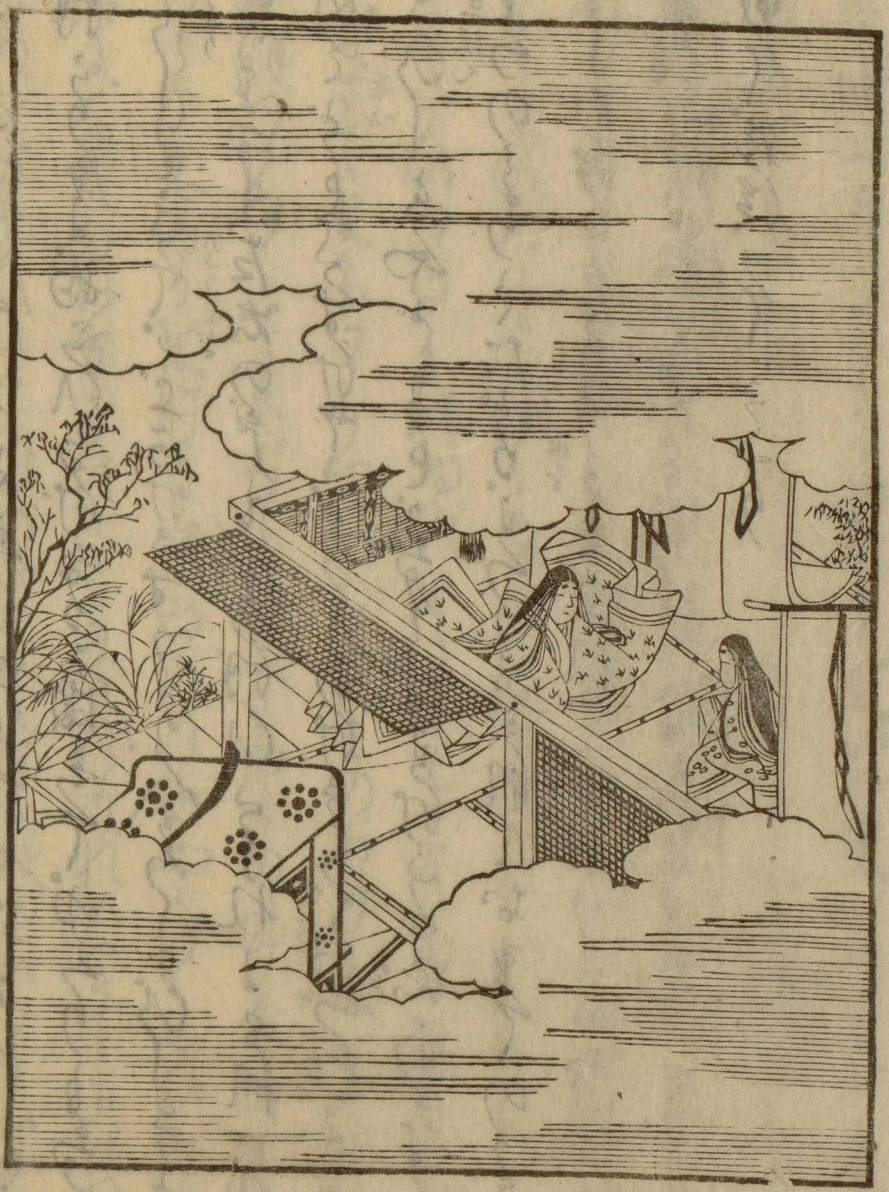
あくがれいでぬれまてさふらひつれどかくらひ
まりし夢院（さい）うき給ちどして、いとしへがたくこゝろ
ぼそきまこの姫（未）君の母小の方のいらかくよるおち
ぶれて、（大戴）其（ヨマウ）れの小のまゝ女ゐへるありかり、むすめだ
かしづきてよろしきけり人だもむげるしらぬ前
よりいおやだもまうでかよひしをとせて（約注）どうぐ
（大戴ノ小方）かよふこの姫（未）君いかく人うさきれくせちれば、むつ
ましくもいひかよひ給ひず、（大戴ノ小方）をのれをば（未ノ）おとしめ
ゐて、おもてぶきまおぼしたりしかば、（未）ひめ君もいれ
有さ夜の心ぐるしげちるも、ことふしひ笑ひぞちぐ
ち夜まくげちること紫どもいひきうをけ、時ぞ

もえいづる春にあひ給はるんとねんじつたりつ
れどふひし（民氏）かはしなどまでよろしびたふまつれ（源ノ）
ひらねあしたまりなどするを（末ん）よそにのこしくべき
なりかりかなしかりしありのうれいしさは、ゐなど
我身ひとりのためになれるとおぼしかひなき
世かれと心ぐるそて、いしくかなしかれば、人たれず
ねをのこなきぬふ、大武の小の方（大武ノ小方ん）されどよまきに
かくたつぎなく、人にうきれありさ夜をかずまん
ぬふ人はありなんや、伝ひだりもつこうさをこそ
こちびきよく思ふまふなれ、かうれありさ夜にて
たけくよ代おぼし、安（ひち）となどのおりをし時のまゝに。

あるきこのこひとけをかなまもあるぬとこそしかふ
れそぢめなどはおぼろけの人のこなりゆるまんべき
まもあらずかしらはしらは四九じいとおしう
もれいひさがるきやうなり冬まなりゆくまくま
いとぐかさつがむかさなくかなしげまながめすご
し給かれとれまは古侍のれれうのれ八謙世中
ゆすりてし給ことまそうなどはなべてのはめ
さず ざえまてぐれなこなひましこそうとさ恨を
えらを給ふれがこのぎんじの君もまりかへりなり
かへりさ雨まさちよりなりて志りく 橙大納言殿の
れ八かうまとまりて待つかなり いとかしかういけ

弥浄土のかざりをとらずいかゞしうかもし
ろさしとどもかざりをなんしのへる佛菩薩乃
変化の身をそ抱しのふめれいけるのをごり
かるき世をなどてむまれ給ひんといひてやがて
いでのひぬことずくなるよの人をぬれあそひ
そかひなさよれ抱代をぶるえ帝九あもをこ版
ぶ末ぶさてもかざりつゝなさこのありさ版を衣を
なげつゝなくてそぐし給ひこゝろうの佛菩薩やと
つとう元ゆるをげる恨なありとやうくせひなり
給ふ大威の小方ふはかをさゝれりれいいさしもむつ
びぬをさそひしてむの心をてなるべきれさうぞく





かたちなどおとろへにかり。さしごろいたうつい
えられど。な紙もれさよげによしあるさ夜
してかうじけなくともとりかへ(来ま)ぬくこも。い
でこちなんことをせるがら。心づましきれあるさ
夜のこすてありがたきを。仏道のむかへになんとかり
きたる。ころうく覚し構(つぐ)ひてれこづらこそあら
さ夜にもいたらを給ひ。このひとをぐにゆりさを給
へとてなん。などうあられげなるさ夜に付とて。
うちもなくべきぞうし。されどゆくこちに心をやり
ていと心ちよげなり。故宮(ひたち)おいきしときをのれなば
おもてぶきなりと覚しすてたりしかばとく

しきやうにありそめましうど。そしごろもなる
うはやむごとなきき所にはぬぼしあがり。太(源)相殿など
おもしまし。うちふれすくきの御どをうつじけなく
也ゆへられ……かばなん。むつびきこしさきんも。たゞ
うことは御ふてきぐし侍つる紙。世中のうくさぐ
めもなりかれば。かずなしぬ。力ハ中々心やすく侍る
もれなりけり。をとびなくこなりしれ有き所のいと
なしく心ぐるしきをちうき程ハをのづからをて
うなりものどうにこれもしくなん侍けるを。うく
ちううまりなんとすれば。うしろめたく長く
御ぼし給ひなどうたへど。心(末)とけてもいらへ給ハず。

ゆへる人をば。こころざしなく。我をこれこゆへるあり
さ風と。碧(ぢね)男し給ことしいとかうくなんあるべきなど
いひしらすを。げ(ホん)よと思ぼすもいとかなしくて。
けぐとなきぬふ。されどうぐべうもあらねば。
(世方)よろげにいひけづらひくらして。さらば侍従をば
まと。日の蓋(くろ)まくまいそげば。うろあはこ
しくて。なくく(詞)さらばまげかふはかうを見ぬふ。
とくりぢりまうで侍らん。かれさそし給もこと
もりちり。まるぬぼしけづらふもさることに侍れば。
(夜方ニ御理あるとて)ちりまこぬふも心くるしくなんと思ひてきこゆ。
(ホん)此人さへ打すてくむとするを。うらめしうもあれ

ふつれうちすてらるゝもことわりなれど。誰(たれ)ま見
ゆづりてかとうしめしうなんとて。いふじうなさ給。
この人(侍従)も抱もさてしやらず。まゝの(詞)遺(ゆいごん)云いさしにも
写しさとず。とし〳〵ごろのしのびがたきよれこと紙
はぐし侍つるまゝかくおぼしぬこちまいざおもれて。
さるかままりあくがるゝことゝて
(侍従)玉かげしこえてもやまじゆくこちのこむけ
の神(うこ)もかけてちかれん。いのちこそしり侍しもなど
いふまいづくくしうなりぬとつぶやかれて。ころも
そしまてひさいづれがかへりこのこをしれけり。
(まん)とし〳〵ごろまびけしもゆきもなれざりつる人(侍従)の。

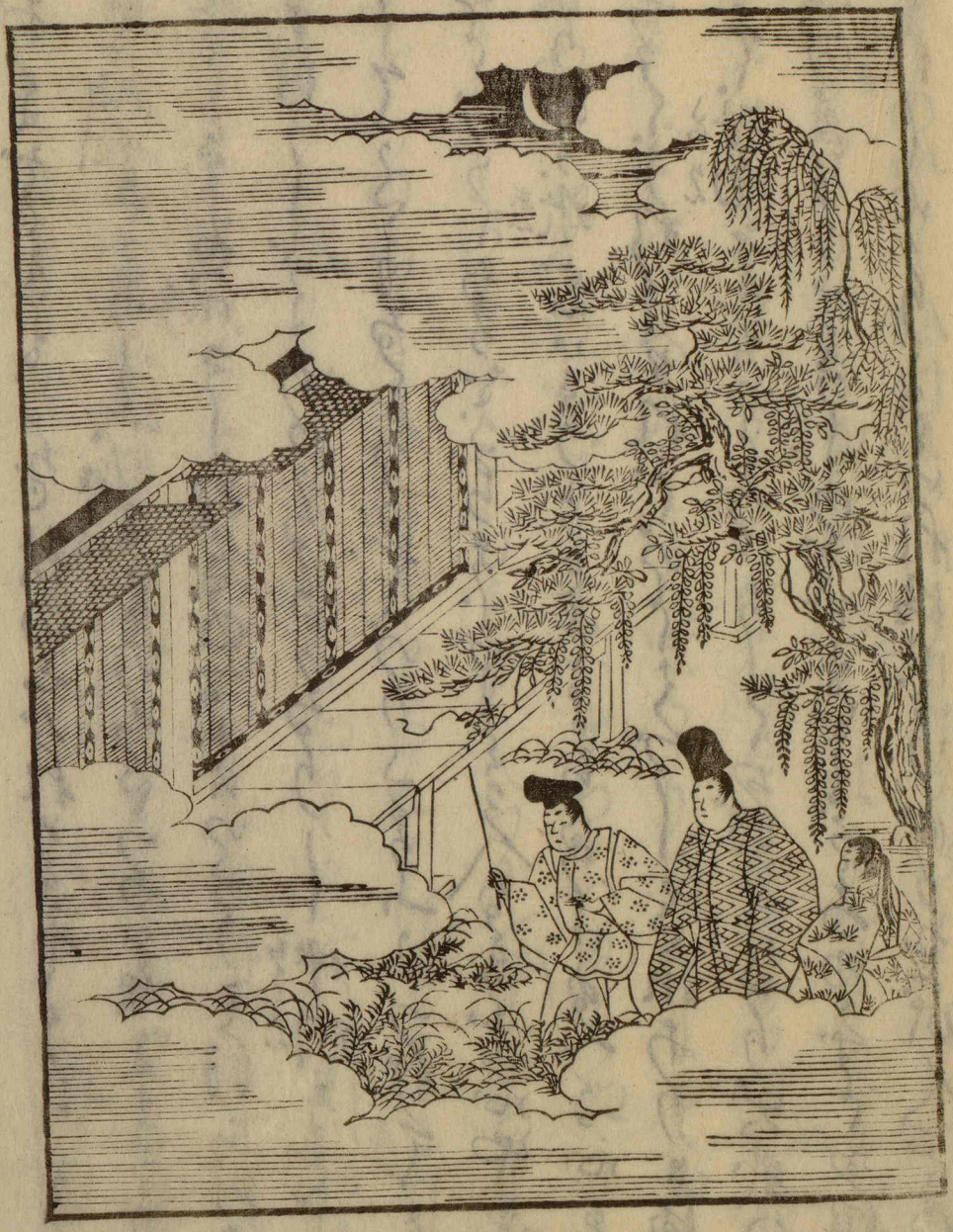
きくつれぬること紙いと心ばそうおぼすよ。よる
もちねらるまじきおいぐ人さへいでやことりぞ。
いかでかたちとまり給ひん。つれらもえこそ念(わん)じ
たつまじかれと。をのが身につけたるたりどもむ
いでくとまるまじうせへる紙。人もろくきく(ホノ)おり寸。
霜月(しも地)ばかりに成ぬれば。ゆきあられがちにて。ほか
にはさ四るまもあるを。朝日夕日をふきぐよりもざ
むぐらの陰(かけ)にふかうけりて。こしの白山さひやら
なる雪のうちに出入(いでいる)しもぐ人ぶまなくて。つれぐと
なぐめ給ひ。たかなきことを思ひなぐさめ。なきつこ思ら
ひこまざつらひしける人さへなくて。よるもちりが夜

東よ。えちの程よろづのことを見し出ておいするに。
うたもなくあれたる家のこぶちしげくまりのやう
なるとすぎ給。おほこさある松に夜の咲(さい)かりて。月
かげにあまよひたる。風につさてざとり。ほふがなつ
かしく。そこもとあきかわりなり。たち菊には
かたりてありしかれば。さし出のへ家より。柳(やなぎ)もい
たうしだりて。何いひぢも。あらねばこれかし
たり。えし心ちするこぶちかとおぼすは。ちやうし山家(ひたち)
なりかり。いと哀にてとしとぶめさを給。別(れい)の惟光(これみつ)は。
かるれしのびありきをとられねばさふらひなるも。
めしよをて。(詞)そくはこひたちの家ぞうしなし。(惟光詞)しう行と

さ也。こゝ(源詞)よありしひとはまぐやたすぐ無らんと
ふしふべき候。けざと抱きんもところをしかるけ
いでよいりてをうそこをよ。よくさづ也よりてを
打出(うちぞ)よ。人さづへしてハをこちらんとの給。こゝ(未ん)よは
いとゞちがめまさるころまて。けくぐとおもし
けるよ。ひる也の景(ゆめ)よ古家(ひとち)のこゝのひそれバさめて
いと名殘かるしくおぼして。もりぬれさるひさしれ
もしつるをとしのごもをて。こゝかしこのおまし
ひさけくろもをなどしつゝれいなしずよづさまて
ちさ(未)さ人をこゝる無もとのひまちさよあれる
かのさのもづくさへそふも心(池)ぐりしき程よちんあめり

けるこれこついりて。光ぐろく人の喜(とと)すうたや
とみるに。いさゝか人げもを消。されどこそゆき
きれこちにこいるれど。人すこげもなき地をとゝ
て。かつり来る程に。月あるくさしむかるにこれば。うう
しかるまぢうりあけて。どぐれうごく気色なり。まぐ
るにつけたる心ち。おそろしくさへおぼゆれど。よ
まてこはづくれば。いと(老人)地ありたるとゝまて。まぐ
しまぐさ紙さきさくてくかれ(詞)いたれぞ。なに人ぞと
とふ。なのりして。(惟光)侍従(詞)の君とさしえし人に。ゑ
ん語こんといふ。それ(老人詞)ハ得たるなん地し語。されど
おぼしつくまじき女なん侍といふ。声(しゑ)いたう(惟光ハ)ねび

すぎこれどきくしおいべときくしりこりうち
まいしひよりずかりぎぬすぐこなる男の悪びやうにも
てなしてなぐやうなれば三ならいずぬにけるめまても
しきつ○などの変化にやと見ゆれどちうよりてこ
しうまなんうけ度いしまはしき。かりしぬれ有様なら
ば。弱○男しさきなべきれ心ざしもこしずなんおいしま
すめうし。しよひもゆきすぎてにとまりしをなへるを。
いらば男しさきんうしろやすくをといへば女だ打つしひ
て。かたしを給れ有様なしばかる浅第が原をう川ろひ
給ひでいはなんやこだとし斗て男しさきなへし。年
へこ人の心まもざらひあらじとのこめづらかなるよ浅



うのれうらひけまいれたりけるがいとなつし
きゝ香しろうをなりそれば、いかゞ(まん)はをんりしきうへ給
てかれしてけるゝ見まゝひきよきておりす。いま(涼)
ゐて、年(訂)じのへぶてしまも、心ぢうりハうもらぜなん。
もやまゝ罪しつるを、さしもおどろかいゐもぬうら
めしさま。いまゝでころこそしつるをすぎならぬ
こゞちのしるさま。えすぎでなんまけきしまける
とてかたびらをすてうきやまゐへれば、例(れい)のいと
つましげまとこまもいしへ罪しゐりずかくぢうり
まけへゐへるがおさうらぬりおもひをしてぞ。
明のうまきしいで給けるかうろ(涼訂)くさがくれりを

やうなるれ男のありさ夜もおぼしつけらる

源 ふぢなこのうち過ぐるくこしけるいまけこそ

やどれしるし女れ。かぞふれもそよなうけ男

ぬしんりしこやこよかちりまけることのおほかりけ

れも。さ夜ぐあれまるんいまのどうよぞ。ひなれ

けれまおとろへし世の拙がたりも笑しけらを

べさ。まるとしへ語つらん長秋のくらしうさか

ども。これまかはうれへ語いんとうしもなくおぼ

ゆるもかけいあやしうなんなどさてなへば

末 どしをへてまつしるしなさけがやどれ家の

こうりますぎぬげりかど思びやうまうちこじろさ

ぬくるけもひもそぞのうもむかしよりもねび
まさりぬくるまやとあぼさう月いりがたまありて
ましのけまどれおさたうよりさもうべきけるどの
ぶつやまるく杵のつまものうるけれがいともれ
やうまさしいりされがおたりくミゆうり芳ま
かもしぬれきつしひのさ夜ぬるどきのぶ茶まやつれ
たううへのミうめよりはミやびうまミゆうをむかし
抱だまさうこぼちたうへもありけうを見しおは
すうまおるじさ夜まてさしふりまけうもあれ
ありひさふうま抱つこしたうけもひのさすがま
あてやうるも心まくあぼされてさううたまて

69038
6AP7B